

青年期の有能感と自己決定感に及ぼす 子ども期の習い事経験

——家族のサポートによる調整効果——

梅 崎 高 行

Experience of After-school Activities in Childhood on
Perceived Competence and Self-determination in Adolescence:
Adjustment effects of family support

UMEZAKI Takayuki

Abstract : Intrinsic motivation is psychologically desirable for social activities. Perceived competence and self-determination are known to be especially important for the development of intrinsic motivation, which is cultivated through various childhood experiences. This study focused on after-school activities that are expected to have positive effects on psychological development. A survey using the reminiscence method was conducted with adolescents. Results were analyzed based on gender, because gender based differences were expected in the examined variables. The results of hierarchical multiple regression analysis indicated that self-determination in adolescence was highly predictable in girls that were fond of after-school activities in childhood when encouraging support was provided by the family. Similar tendencies were observed when musical activities were analyzed by considering selective characteristics of after-school activities based on gender. Above results suggest the necessity for family support, in addition to preferences for activities. It is concluded that the role of the family is important for different childhood activities, especially in relation to professional early childhood education.

Key Words : After-school activities, self-determination, girls

要旨 : 社会的な活動に望ましい心性として内発的動機づけが想定されている。なかでも有能感と自己決定感は、内発的動機づけを構成する要素として、子ども期に種々の経験を通して醸成されることが望ましいと考えられる。このような心理発達にポジティブな影響をもたらす活動として、本研究では習い事を取り上げて、青年を対象に回想法による調査を行った。検討に用いられた変数には性差が見られ、分析は男女ごとに進められた。階層的重回帰分析を用いた分析の結果、幼少期の習い事が好きであった女子において、家族の親和的サポートが得られた場合に、青年期の自己決定感が高く予想された。この結果は、性別による習い事の選択的特徴を考慮し、音楽系の習い事に限って分析した場合でも同様の傾向が見られた。単に習い事が好きでただけではなく、家族によるサポートの必要性を示唆するこの結果は、幼少期の諸活動、とりわけ早期専門的教育における家族役割の重要性を示唆するものと思われる。

キーワード : 習い事, 自己決定感, 女子

問題と目的

勉強や仕事に対する取り組みなど、社会的な活動に適応的な心性として従来から、内発的動機づけが想定されている (Deci & Ryan, 1985)。なかでも内発的動機づけを構成する要素としての有能感と自己決定感、活動に持続的に取り組む人が共通して高くもつ、望ましい動機づけと考えられている。青年期に向けて活動に対する有能感と自己決定感を醸成し、もって青年期のウェル・ビーングを支えることは、青年期の発達課題とも言えよう (上長, 2016; 桜井, 1993)。

青年期の有能感や自己決定感を育む主要な機会として、学校や部活動における人間関係が挙げられる。栗谷・本間 (2009) では、学校における友人関係がもっとも強く自己肯定感を規定して有能感や自己決定感を育み、他には部活・行事、教師関係、学習が、友人関係に続く有能感・自己決定感醸成の機会になるといった結果を見出している。このうち部活動については、部活動への参加が学校行事や学習に対する意欲を高め (山本・荒木・神野, 2010)、有能感や学校適応感を介して社会的スキルを有意に予測する (青木, 2005) といった報告も見られる。逆説的に言えばこれらの知見は、学校や部活動における人間関係の喪失ないし躓きが、後の有能感や自己決定感の発達を阻害する可能性も示唆している。昨今、典型的な人間関係の問題とも言える深刻ないじめの要因として、学校での孤立が取り上げられる。児童・生徒の孤立に備える教師の然るべき信念 (酒井・中山・深澤・熊谷・菅原, 2017) や、これに基づくバックアップ体制の構築に加えて、深刻な事態を事前に回避し、勉強や部活動を通して人間関係を醸成するような、親や教師、指導者に対する教育プログラムの開発・実施が求められていると言えるだろう (Ikesako & Miyamoto, 2015)。

以上に加え近年では、就学以前の幼児期からの経験が、後の社会適応を支えるといった報告も盛んになされている。これらの研究では、IQ や学業成績に代表される認知的な能力と対置されて、社会情動的スキルへの注目が高まっている (前川・酒井・眞榮城・梅崎・高橋, 印刷中)。社会情動的スキルとは、目標の達成 (忍耐力, 自己抑制, 目標への情熱)、他者との協働 (社交性, 敬意, 思いやり)、情動の制御 (自尊心, 楽観性, 自信) から構成される (OECD, 2015)。家庭環境や良質の保育の他、習い事も、このスキルを育む幼児期の主要な経験と考えられる (Masten &

Coatsworth, 1998)。

Mahoney & Cairns (1997) によれば、習い事は幼児期から就学初期にかけて子どもの有能感を育み、もって就学後のドロップアウトを遠ざけると言う。また佐々木 (2009) は、習い事の中でも、幼児期に最も多く選択されるスイミングを取り上げて、活動が子どもの有能感や自己受容感を高める直接的な影響を見出している。同様に梅崎ら (2014) も、習い事が有能感を育み、後の社会適応を予測するといった観点から、子ども期の習い事に注目した縦断研究に着手している。その結果、親がきっかけとなって開始されることの多い幼児期の習い事において、加齢とともに子どもが活動の主体となる様子が示されている。こうした結果を踏まえ、幼児期の習い事がその後の社会適応にどのような効果をもたらすのか注目されるが、縦断研究の性格上、成果については一定の時間を待たねばならない。

そこで本研究では、成田 (2013) を参考に回想法を用いて、青年期の有能感と自己決定感に及ぼす子ども期の習い事の経験について検討を行う。佐々木 (2009) では、有能感や自己受容感を高める子どもの習い事の関連要因として、親意識や夫婦協力の重要性を示唆している。また梅崎ら (2014) でも、親に対する示唆として、次第に意思決定の主体となる幼児の心性に対する配慮や、取り組みに対する賞賛的な養育態度の重要性が指摘されている。そもそも費用や送迎など、子ども期の習い事が家族のサポートなしでは成り立たないことから、本研究でも、家族の影響を含めた習い事の検討を行う。対人関係や活動に際して生じる葛藤など、習い事では、保育所・幼稚園とはまた異なる大人の関わりが求められるに違いない (中山, 1996; 成田, 2013)。加えて大人の関わりは、ポジティブな影響をもたらすものばかりではない。身代わりの競技者という言葉に表現されるように、子どもにとって浸食的で過剰なサポートが、子どもの有能感や自己決定感にネガティブな影響をもたらす可能性も考えられる (梅崎・名取, 2014)。子どもが認知するこれらサポートの適切さに注目した家族関与の仕方についても検討が求められるだろう。

以上から本研究では家族のサポートにも目を向け、これを調整要因と見なして、青年期の有能感ならびに自己決定感に及ぼす子ども期の習い事について検討することを目的とする。

方 法

調査協力者、期間、場所、手続き 2015年度梅崎ゼミ3年生14名で分担し、性別の偏りに配慮しながら一人当たり10名を目安に、子ども期に（就学前から小学校卒業にかけて）習い事をしてきた同世代の知人に依頼をして質問紙調査を実施した。期間は2015年度冬期休業中であり、帰省に合わせて調査を実施することで、データ収集地域の広がりに努めた。データ収集先は、関西と四国地域に位置する4県に及んだ。調査は卒業研究の演習として実施され、趣旨およびプライバシーの保護について文書と口頭で説明を行った上で、同意が得られた協力者から回答を得た。有効回答者数は166名、性別の内訳は男性85名、女性81名であり、平均年齢は20.6歳（レンジ17.0歳～24.0歳）であった。回答はいずれも無記名で行われ、実施時間は約10分であった。

質問紙の構成 質問紙は、(1)属性、(2)子ども期に最も長く続けた習い事一つと継続期間、(3)習い事

への態度尺度（佐々木, 2009）、(4)習い事に対する家族のサポート尺度（佐々木, 2009）、(5)有能感・自己決定感尺度（桜井, 1993）の5項目から構成された。

(1) 属性

対象者の性別と誕生日および誕生月の記入を求めた。

(2) 子ども期に最も長く続けた習い事と継続期間

子ども期（就学前～小学校卒業）に最も長く続けた習い事（一つ）と、継続月数について尋ねた。

(3) 習い事への態度尺度

習い事に対する子ども期の意識（好きであったかどうか）と自己評価（優れていたかどうか）を尋ねる項目である。佐々木（2009）で用いられた「習い事に対する子どもの意識尺度」および「子どもの有能感に関する自己評価尺度」から、回答者の負担を考慮して項目を抜粋し、習い事一般を調査する本研究の目的に合わせて語句を修正した上で、「習い事への態度尺度」として表1に示す6項目を作成した。回答者は「そう思わない」から「そう思う」まで、5件法で回答する

表1 習い事への態度の因子分析結果（重み付けのない最小2乗法、直接オブリミン回転）

		因子		共通性	M	SD
		1	2			
[好意因子]						
3	私は習い事が好きだった	.98	-.11	.43	3.46	1.27
4	習い事に行く前はいつも気が重くなった（逆）	.55	-.00	.29	3.36	1.29
2	同じ習い事に通う友だちとの仲が良かった	.41	.12	.21	3.99	1.13
5	教えてくれる指導者や先生が好きだった	.40	.00	.15	3.58	1.14
[評価因子]						
1	はじめてやることでも、たいていうまくできた	-.03	.87	.33	3.10	1.14
6	同年代の友だちよりも、優れていた	.03	.63	.32	3.04	1.07
因子間相関						
因子 1		1.00				
因子 2		.41	1.00			

表2 習い事に対する家族のサポートの因子分析結果（重み付けのない最小2乗法、直接オブリミン回転）

	因子		共通性	M	SD
	1	2			
[親和的サポート因子]					
7 家族は上達をほめたり発表会の様子をビデオに撮ったりしてくれた	.74	.01	.43	3.71	1.27
1 家庭では習い事がよく話題にのぼった	.70	-.06	.38	3.43	1.14
6 家族は常に送迎や応援などのサポートをしてくれた	.65	-.03	.39	4.03	1.16
4 家族は私が習い事をするのがうれしそうだった	.55	.02	.27	3.55	1.07
3 習い事について家族によく相談した	.47	.03	.20	2.44	1.10
[浸食的サポート因子]					
2 習い事について家族から何か言われることがわずらわしかった（逆）	.12	1.02	.31	3.45	1.24
5 習い事をめぐって家族とよくケンカした（逆）	-.08	.53	.31	3.90	1.17
因子間相関					
因子 1	1.00				
因子 2	-.18	1.00			

表 3 有能感尺度

1	有能な人間である
2	むずかしい仕事(課題)でもうまくやりとげている
3	物事は他の人より上手にしている
4	なるべく簡単にできる仕事をしている(逆)
5	他の人には難しいようなパズルや問題を簡単に解く方である
6	やりかけたことは、うまくやりとげている
7	まわりの人ができないことでも、うまくやっている
8	現在、所属する職場(学校)では優秀な方である

表 4 自己決定感尺度

1	自分の生き方は、自分で決めている
2	自分のすることでも、他人に決めてもらうことが多い(逆)
3	自分の思いどおりに行動している
4	自分に関わる大切なことほど、他人に頼らず自分の判断で決めている
5	何かやりたいときには、他人に頼らず自分の判断で決めている
6	自分がやりたいと思うことでも、他人からやめろと言われたら、やめている(逆)
7	他人の考えにこだわらず、自分の考えどおりにしている
8	グループ活動で何をするか決めるときは、誰か他の人の意見に従っている(逆)

よう指示された。

(4) 習い事に対する家族のサポート尺度

習い事に対する家族の関わりを尋ねる項目である。佐々木(2009)で用いられた「子どもの習い事に対する親の行動尺度」から、回答者の負担を考慮して項目を抜粋し、習い事一般を調査する本研究の目的に合わせて語句を修正した上で、「習い事に対する家族のサポート尺度」として表2に示す7項目を作成した。回答者は「そう思わない」から「そう思う」まで、5件法で回答するよう指示された。

(5) 有能感・自己決定感尺度

桜井(1993)が作成した、大学生を対象とした有能感と自己決定感を測定する尺度である。本調査の対象者がもつ日常的な有能感ならびに自己決定感を測定する上で適していると判断され、語句を一部修正して用いた(表3、表4)。回答者は「いいえ」から「はい」まで、6件法で回答することが求められた。

結果

研究1 習い事の態度と家族のサポートが青年期の心性に及ぼす影響

研究1では、青年期の有能感と自己決定感に及ぼす習い事の態度の影響を、家族によるサポートの質が調整するといった仮説について検証を行う。

(1) 習い事への態度尺度の構造 確認的な因子分析により、2つの項目を測定する本尺度を2因子構造と見なすことが妥当であるか検討した。6項目の相関係数行列の固有値は2.350, 1.225, 0.818と減少し、第2因子までの累積説明率は59.58%であった。固有値の減衰状況やスクリー・プロットの形状から、当初の仮説に従って2因子解として扱うことは妥当であると判断された。

因子分析では、重み付けのない最小2乗法と直接オブリミン回転を採用した。表1に直接オブリミン回転解(因子負荷量)、共通性、項目得点の平均値(M)と標準偏差(SD)、因子間の相関係数を示す。

第1因子は「3. 私は習い事が好きだった」、「4. 習い事に行く前はいつも気が重くなった(逆転項目)」、「2. 同じ習い事に通う友だちとの仲が良かった」、「5. 教えてくれる指導者や先生が好きだった」という習い事の好き嫌いに関する項目の負荷量が高いため「好意因子」と解釈した。第2因子は「1. はじめてやることでも、たいていうまくできた」、「6. 同年代の友だちよりも、優れていた」という習い事に対する自己評価に関する項目の負荷量が高いため「評価因子」と解釈した。

第1因子と第2因子の間に弱い相関が見られるので、2つの態度はまったく独立というものではなく、相補的な態度であると考えられた。したがって2因子までの累積分散説明率は算出されない。Cronbachの α 係数を算出したところ、好意因子は.66、評価因子は.72であった。

(2) 習い事に対する家族のサポート尺度の構造 探索的な因子分析により、習い事に対する家族の関わり合いの因子構造を検討した。7項目の相関係数行列の固有値は2.616, 1.476, 0.832と減少し、第2因子までの累積説明率は58.45%であった。固有値の減衰状況やスクリー・プロットの形状から総合的に判断し、2因子解を採用することとした。

因子分析では、重み付けのない最小2乗法と直接オブリミン回転を採用した。表2に直接オブリミン回転解(因子負荷量)、共通性、項目得点の平均値(M)と標準偏差(SD)、因子間の相関係数を示す。2因子の累積分散説明率は46.91%であった。

第1因子は「7. 家族は上達をほめたり発表会の様子をビデオに撮ったりしてくれた」、「1. 家庭では習い事がよく話題にのぼった」、「6. 家族は常に送迎や応援などのサポートをしてくれた」、「4. 家族は私が習い事をすることがうれしそうだった」、「3. 習い事

について家族によく相談した」という習い事に対する距離感が適度なサポートに関する項目の負荷量が高いため「親和的サポート因子」と解釈した。第2因子は「2. 習い事について家族から何か言われることがわずらわしかった」、「5. 習い事をめぐって家族とよくケンカした」という習い事に対する指示的で統制的なサポートに関する項目の負荷量が高いため「浸食的サポート因子」と解釈した。

第1因子と第2因子の間にはほぼ相関は見られず、2つの関わりへの傾向は独立したものと考えられた。Cronbach の α 係数を算出したところ、親和的サポート因子は .76, 浸食的サポート因子は .69 であった。

(3) 有能感と自己決定感尺度の得点化 桜井(1993)によるオリジナル版尺度の構成に従い、各8項目を足し上げた合計値をもって、「有能感得点」および「自己決定感得点」を算出した。

(4) 基礎統計量と相関係数 各変数の基礎統計量は表5に示した通りであった。対象者の性別によって各変数の分布に有意な偏りが見られるか検討したところ、好意 ($t(164) = .96, n.s.$), 評価 ($t(164) = 1.31, n.s.$), 浸食的サポート ($t(164) = .99, n.s.$), 自己決定感 ($t(159) = .89, n.s.$) については性別による分布の違いは見られなかった。一方、親和的サポート ($t(164) = 4.01, p < .001$) と有能感 ($t(142.39) = 3.77, p < .001$)

については性別による有意な得点の差が認められ、家族のサポートが親和的であったという評価は女子の方で平均点が高く、一方で青年期の有能感は男子の方で平均点が高かった。そのため以降の分析は女子と男子を別に実施する。

(5) 有能感と自己決定感にかかる習い事への態度と家族のサポートの検討 有能感および自己決定感に関わる要因について、階層的重回帰分析を用いて検討した。解析に先立ち使用する変数間の相関係数を女子と男子でそれぞれ算出した(表6, 表7)。

まず女子では、表6に示すように年齢と有能感 ($r = .24, p < .01$), 持続年月と評価 ($r = .29, p < .01$), 持続年月と親和的サポート ($r = .30, p < .01$), 好意と親和的サポート ($r = .37, p < .001$), 好意と有能感 ($r = .29, p < .01$), 好意と自己決定感 ($r = .29, p < .01$), 評価と親和的サポート ($r = .29, p < .01$), 評価と有能感 ($r = .39, p < .001$) の間に正の相関が見られた。また年齢と親和的サポート ($r = -.30, p < .01$), 好意と浸食的サポート ($r = -.39, p < .01$), 浸食的サポートと自己決定感 ($r = -.23, p < .05$) の間に負の相関が見られた。

次いで男子では、表7に示すように持続年月と親和的サポート ($r = .29, p < .05$), 好意と評価 ($r = .42, p < .001$), 評価と有能感 ($r = .55, p < .001$), 評価と自

表5 各変数の基礎統計量と変数間相関

	M	SD	a	b	c	d	e	f	g	h
a: 対象者の性別 (1: 男性, 2: 女性)	1.49	0.50								
b: 対象者の年齢	20.78	2.50	-.03							
c: 習い事の持続年月	82.02	42.99	-.31***	-.03						
d: 好意	17.03	2.64	-.08	.02	.11					
e: 評価	6.13	1.94	.10	-.02	.15	.29***				
f: 親和的サポート	17.16	4.09	-.30***	-.22***	.35***	.30***	.13			
g: 浸食的サポート	4.64	2.11	-.08	-.10	.14	-.27***	-.03	.13		
h: 有能感	26.71	6.02	.29***	.15	-.03	.19**	.49***	-.11	-.11	
i: 自己決定感	32.85	5.54	.05	.07	.04	.25**	.25**	.13	-.20**	.38***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表6 女子における各変数の基礎統計量と変数間相関

	M	SD	a	b	c	d	e	f	g
a: 対象者の年齢	20.86	3.33							
b: 習い事の持続年月	94.71	46.30	.01						
c: 好意	17.22	2.58	.03	.04					
d: 評価	5.94	1.79	-.02	.29**	.15				
e: 親和的サポート	18.34	3.61	-.30**	.30**	.37***	.29**			
f: 浸食的サポート	4.80	2.14	-.17	.15	-.39**	-.07	.04		
g: 有能感	25.04	4.78	.24**	.17	.29**	.39***	.03	-.11	
h: 自己決定感	32.57	5.50	.10	.05	.29**	.20	.19	-.23*	.38**

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表 7 男子における各変数の基礎統計量と変数間相関

	M	SD	a	b	c	d	e	f	g
a: 対象者の年齢	20.70	1.09							
b: 習い事の持続年月	68.37	34.50	-.25*						
c: 好意	16.83	2.70	-.04	.16					
d: 評価	6.34	2.09	-.03	.90	.42***				
e: 親和的サポート	15.90	4.22	-.19	.29*	.21	.08			
f: 浸食的サポート	4.48	2.08	.07	.10	-.21	.03	.19		
g: 有能感	28.48	6.69	.12	.03	.17	.55***	-.06	-.08	
h: 自己決定感	33.14	5.60	.01	.09	.21	.29**	.11	-.19	.39**

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

己決定感 ($r = .29, p < .01$), 有能感と自己決定感 ($r = .39, p < .01$) の間に正の相関が見られた。また年齢と持続年月 ($r = -.25, p < .05$) の間に負の相関が見られた。

有能感ならびに自己決定感に対する階層的重回帰分析では, 第 1 ステップに関連要因として好意または評価, 親和的サポートまたは浸食的サポート, 統制変数として対象者の年齢ならびに習い事の持続年月を投入した。第 2 ステップでは, 家族によるサポートの質 (親和的/浸食的) が, 習い事への態度 (好意/評価) と現在の心性 (有能感/自己決定感) との関連を調整する要因であるかどうかを検討するため, 好意と有能感, 好意と自己決定感, 評価と有能感, 評価と自己決定感の要因をそれぞれ掛け合わせて作成した交互作用項を投入した。多重共線性の問題を回避するために, 解析で使用する連続変数の説明変数はすべて平均値からの偏差に変換した値を使用した (Aiken & West, 1991)。各変数における VIF はいずれも 1.6 未満であり, 多重共線性の問題は認められなかった。

表 8 に男女別で現在の心性 (有能感/自己決定感)

にかかる習い事への態度 (好意/評価) と家族によるサポートの質 (親和的/浸食的) の交互作用について重決定係数を示した。この表に示されるように, 交互作用の見られた組合せは女子の自己決定感に対する習い事への好意と家族の親和的サポートの組合せのみであった。以下では有意差の見られたこのモデルについて分析する。

自己決定感について, 第 1 ステップにおける重決定係数は有意でなく ($R^2 = .10, n.s.$), 第 2 ステップにおける重決定係数に有意な増分が見られた ($\Delta R^2 = .11, p < .05$)。第 2 ステップにおいて有意であった変数の非標準化係数 (b) と標準化係数 (β) は, 好意 ($b = 2.52, \beta = .27, p < .05$) と, 好意と親和的サポートの交互作用 ($b = .06, \beta = .27, p < .05$) であった (表 9)。

自己決定感に対する好意と家族の親和的サポートの交互作用が有意であったことから, 得られた回帰式に好意と親和的サポートそれぞれの 1 SD (高) と -1 SD (低) の値を代入してプロットし, 図 1 を作成した。この図に示すように, 家族のサポートを踏まえた好意と自己決定感の関連の有意性を調べるために,

表 8 有能感と自己決定感に関わる要因の交互作用 (男女別)

対象者の性別	習い事に対する態度	家族のサポートの質	青年期の心性	非標準化係数 (b)	標準化係数 (β)	有意差
女子	好意	親和的	有能感	-.01	-.03	n.s.
		浸食的		.01	.02	n.s.
	評価	親和的		-.10	-.13	n.s.
		浸食的		-.03	-.03	n.s.
	好意	親和的	自己決定感	.13	.27	$p < .05$
		浸食的		.01	.00	n.s.
男子	評価	親和的		.07	.67	n.s.
		浸食的		.15	.10	n.s.
	好意	親和的	有能感	-.06	-.09	n.s.
		浸食的		.03	.04	n.s.
	評価	親和的		-.09	-.13	n.s.
		浸食的		-.15	-.13	n.s.
	好意	親和的	自己決定感	.05	.10	n.s.
		浸食的		-.15	-.19	n.s.
	評価	親和的		-.05	-.09	n.s.
		浸食的		-.10	-.11	n.s.

表9 女子の自己決定感に関わる要因（好意×親和的サポート）の検討：最終ステップの結果

変数	ステップ1		ステップ2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
ステップ1：統制変数ならびに各説明変数の主効果				
対象者の年齢	.22	.19	.34	.19
習い事の継続年数	.00	.01	.00	.01
好意	.48	.25	.59*	.25
親和的サポート	.23	.20	.36	.20
ステップ2：交互作用				
好意×親和的サポート			.13*	.06
ΔR^2	.10		.16	
調整済み R^2	.06		.11*	

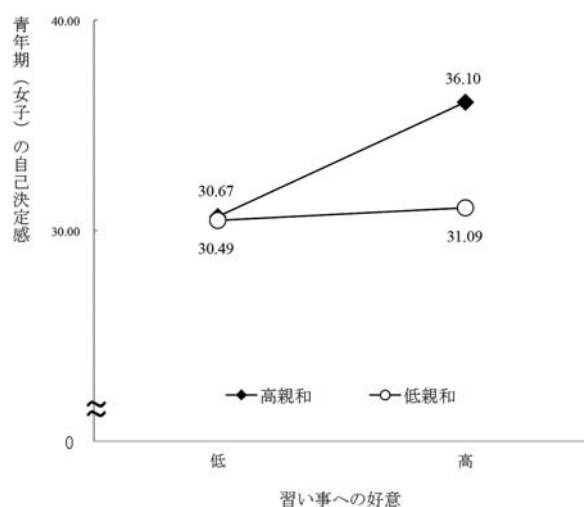
* $p < .05$ 

図1 習い事への好意と青年期（女子）の自己決定感：家族による親和的サポートの調整効果

Aiken & West (1991) に従い下位検定を行った。好意と親和的サポートのセンタリング基準を ± 1 SD に変更して重回帰分析を実施したところ、家族の親和的サポートが低い場合に好意と自己決定感の間に有意な関連は見られなかった ($b = .12$, $\beta = .05$, $n.s.$)。一方、家族の親和的サポートが高い場合には、好意と自己決定感の間に有意な関連が見られた ($b = 1.05$, $\beta = .49$, $p < .01$)。

考察

研究1では、青年期の有能感と自己決定感に影響を及ぼす子ども期の経験として習い事を取り上げ、その態度が望ましいー習い事が好き、あるいは習い事に対する自己評価が高いー場合に、青年期の有能感と自己決定感の高さを予測するモデルについて検証を試みた。このとき調整要因として、習い事に対する家族の親和的なサポートの影響についても検討を行った。その結果、女子において、習い事が好きで、かつ家族の

サポートが親和的な場合に、青年期の自己決定感の高さが有意に予測された。一方、習い事に対する好意が高い場合でも、家族の親和的サポートが低い場合に、自己決定感の高さは予測されなかった。

習い事が好きである場合に家族の親和的なサポートが、自己決定感を高く予測するというこの結果は、家族の親和的なサポートの重要性を顕著に現している。ただ習い事が好きであるだけでなく、青年期の自己決定感に家族から受けた親和的なサポートの記憶が影響するというこの結果は、有能感や自己受容感を高める機会と見なしてスイミングを取り上げた佐々木(2009)における親役割の重要性に関する示唆とも同期する。どの親も子どものために思い、よかれと思って行為するはずであるが、その関わりの仕方は交互作用の結果から、子どもが知覚するレベルにおいて親和的であるかどうか問われていることが示唆された。

ただし、この結果は女子においてのみ確かめられ、男子では同様のモデルを予測できなかった。また女子においても、青年期の望ましい心性として予測できたのは自己決定感のみであり、有能感を予測することはできなかった。これらは性別の他にも、習い事の種類が影響しているのかもしれない。たとえば性別では、習い事の選択に性差が見られる。またそのような選択の背景に家族のジェンダー観が影響しており、家族による女子に対する特有の働きかけと、男子に対する特有の働きかけとがそれぞれ関係しているのかもしれない。さらに、習い事が文化系か体育系か、個人の活動か集団の活動かといった点においても、活動を通して子どもが得る恩恵には違いが見られるかもしれない。そこで研究2では、これらの点から一部を勘案した検討を進める。

研究 2 性別と習い事の種類の勘案した検討

研究 2 では、研究 1 で課題とされた性別と習い事の種類の勘案した検討を行う。あらためて対象者が子ども期にどのような習い事に従事していたかを踏まえ、そのうち選択に性別による偏りが見られるものを抽出した上で、性別と習い事の組合せが特徴的な対象について研究 1 同様のモデル検証を試みる。

結果

(1) 対象者の習い事と性別による選択の特徴 女子では 47.67% が音楽系の習い事を行い、これに続くスポーツ系の習い事選択者は、女子全体の 24.42% であった (表 10)。全体の半数を占めたこの結果から、音楽系習い事を行っていた女子を対象にモデル検証を行う。

(2) 音楽系女子を対象とした検討 有能感と自己決定感に関わる要因について、階層的重回帰分析を用い

て検討した。解析に先立ち使用する変数間の相関係数を算出した (表 11)。

持続年月と評価 ($r = .47, p < .01$)、持続年月と有能感 ($r = .33, p < .05$)、好意と親和的サポート ($r = .40, p < .01$)、好意と有能感 ($r = .35, p < .05$)、好意と自己決定感 ($r = .37, p < .05$)、評価と親和的サポート ($r = .45, p < .01$) の間に正の相関が見られた。また浸食的サポートと自己決定感 ($r = -.37, p < .05$) の間に負の相関が見られた。

表 12 に現在の心性 (有能感/自己決定感) にかかる習い事への態度 (好意/評価) と家族によるサポートの質 (親和的/浸食的) の交互作用について重決定係数を示した。この表に示されるように、交互作用の有意傾向が見られた組合せは、女子全体のモデル同様に、自己決定感に対する習い事への好意と家族の親和的サポートの組合せのみであった。以下ではこのモデルの分析過程について記述する。

表 10 女子の習い事

系	内容	人数 (%)	平均持続年月 (SD)
音楽	ピアノなど	41 (47.67)	110.93 (43.39)
スポーツ・武道	スイミングなど	21 (24.42)	70.90 (35.27)
学習	英会話など	10 (11.63)	75.60 (33.85)
文化	書道など	9 (10.47)	80.67 (43.59)
表現	バレエ	5 (5.81)	120.40 (84.14)
		86 (100.00)	94.71 (47.15)

表 11 各変数の基礎統計量と変数間相関 (女子×音楽系習い事)

	M	SD	a	b	c	d	e	f	g
a: 対象者の年齢	20.46	1.08							
b: 習い事の持続年月	110.93	43.39	.26						
c: 好意	16.95	2.60	-.23	-.01					
d: 評価	5.66	1.80	.15	.47**	.04				
e: 親和的サポート	18.56	3.33	-.03	.30	.40**	.45**			
f: 浸食的サポート	5.29	2.31	-.13	-.03	-.21	-.04	.05		
g: 有能感	24.70	4.47	.16	.33*	.35*	.27	.30	-.14	
h: 自己決定感	32.34	5.75	.12	-.04	.37*	.24	.23	-.37*	.16

* $p < .05$ ** $p < .01$

表 12 有能感と自己決定感に関わる要因の交互作用 (女子×音楽系習い事)

習い事に対する態度	家族のサポートの質	青年期の心性	非標準化係数 (b)	標準化係数 (β)	有意差
好意	親和的	有能感	-.09	-.19	n.s.
	浸食的		.04	.06	n.s.
評価	親和的		-.14	-.23	n.s.
	浸食的		.17	.16	n.s.
好意	親和的	自己決定感	.21	.31	$p < .10$
	浸食的		-.17	-.17	n.s.
評価	親和的		.04	.05	n.s.
	浸食的		.07	.05	n.s.

表 13 女子における音楽系習い事の自己決定感に関わる要因（好意×親和的サポート）の検討：最終ステップの結果

変数	ステップ 1		ステップ 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
ステップ 1：統制変数ならびに各説明変数の主効果				
対象者の年齢	1.34	.95	1.19	.91
習い事の継続年数	-.02	.02	-.02	.02
好意	.87*	.30	.94*	.38
親和的サポート	.20	.31	.32	.30
ステップ 2：交互作用				
好意×親和的サポート			.21 +	.11
ΔR^2	.20		.29	
調整済み R^2	.10		.17 +	

+ $p < .10$ * $p < .05$

自己決定感に対する階層的重回帰分析では、第 1 ステップに関連要因として好意、親和的サポート、統制変数として対象者の年齢ならびに習い事の持続年数を投入した。第 2 ステップでは、家族による親和的サポートが、習い事への好意的態度と現在の自己決定感との関連を調整する要因であるかどうかを検討するため、好意と親和的サポートを掛け合わせて作成した交互作用項を投入した。多重共線性の問題を回避するために、解析で使用する連続変量の説明変数はすべて平均値からの偏差に変換した値を使用した (Aiken & West, 1991)。各変数における VIF はいずれも 1.3 未満であり、多重共線性の問題は認められなかった。

自己決定感について、第 1 ステップにおける重決定係数は有意でなく ($R^2 = .20$, $n.s.$)、第 2 ステップにおける重決定係数に増分の有意傾向が見られた ($\Delta R^2 = .17$, $p < .10$)。第 2 ステップにおいて有意であった変数の非標準化係数 (b) と標準化係数 (β) は、好意 ($b = .94$, $\beta = .41$, $p < .05$) であり、好意と親和的サポートの交互作用には有意傾向が見られた ($b = .21$, $\beta = .31$, $p < .10$) であった (表 13)。

自己決定感について習い事に対する好意が有意であり、家族の親和的サポートの交互作用に有意傾向が見られたことから、得られた回帰式に好意と親和的サポートそれぞれの 1 SD (高) と -1 SD (低) の値を代入してプロットし、図 2 を作成した。この図に示すように、家族のサポートを踏まえた好意と自己決定感の関連の有意性を調べるために、Aiken & West (1991) に従い下位検定を行った。好意と親和的サポートのセンタリング基準を ± 1 SD に変更して重回帰分析を実施したところ、家族の親和的サポートが低い場合に好意と自己決定感の間に有意な関連は見られなかった ($b = .24$, $\beta = .11$, $n.s.$)。一方、家族の親和的サポート

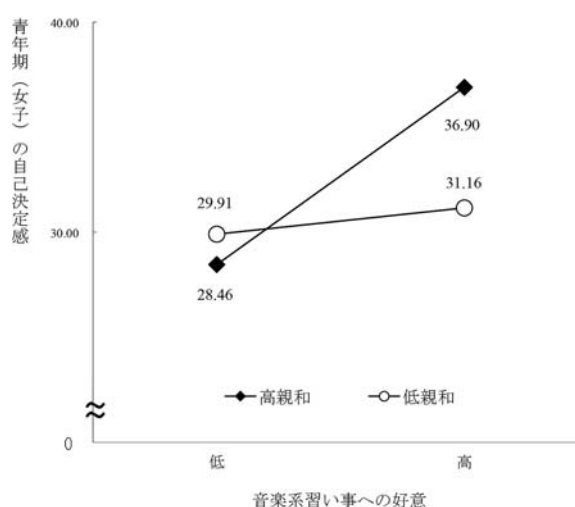


図 2 音楽系習い事への好意と青年期（女子）の自己決定感：家族による親和的サポートの調整効果

が高い場合には、好意の高さと自己決定感の間に有意な関連が見られた ($b = 1.64$, $\beta = .71$, $p < .01$)。

考察

研究 2 では、習い事を選択に持性別的な特徴が見られることから、これを考慮した検討を行った。その結果、音楽系習い事を経験した女子を対象とした分析から、女子の全体的傾向と同様の結果が示された。家族による親和的なサポートの認知が、青年期の自己決定感の高さを予測するというものであり、習い事における家族のサポートの重要性が音楽系習い事に限っても示唆された。

総 合 考 察

本研究では、社会的な活動にとって望ましいとされる有能感と自己決定感の高さを青年期の発達課題と見

なし、この心性に対する幼児期の習い事の態度について、家族のサポートを含めた検討を行った。検討に用いた諸変数のうち、親和的サポートと有能感については性差が見られたことから、性別ごとにモデル検証を進めた。すると女子において、習い事への好意が家族の親和的サポートを調整変数として、青年期の自己決定感を予測するという結果が得られた。この結果は、性による選択的特徴が見られた結果を踏まえ、音楽系習い事に限ったモデル検証でも同様の傾向が確かめられた。女子において単に習い事が好きであるだけでなく、家族の親和的サポートが伴って初めて青年期の自己決定感が予測されるというこの結果は、端的には、家族によるサポートの重要性を物語っている。加えて本調査が青年期を対象とした回想法によるものであることから、青年期を生きる女性の健全な心理にとって幼少期の習い事が、家族の温かなサポートを伴うものとして記憶され、構成されることの重要性について、示唆を与えるものと考えられる。

一方男子では、これらの結果が見られなかったことから、対象者を増やし、選択される習い事の特徴を踏まえた検討が求められる。加えて、青年期の心性をかたちづくる習い事経験の独自性を明らかにするために、習い事経験のない対象者を視野に入れた検討も必要となるだろう。以上、早期専門的教育に対する議論はこれまでもなされてきたが、その活動が好きかどうかという本人の主体性、および、これを支える家族による適度なサポート環境から、今後子どもの健全な発達に対する議論が求められよう。

引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. (1991). *Multiple regression: Testing and interpreting interaction*. California: Sage.
- 青木邦男. (2005). 高校運動部員の社会的スキルとそれに関連する要因. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, **5**, 25-34.
- 栗谷初子・本間友巳. (2009). 思春期の自己肯定感のあり方に影響を及ぼす要因について—学校適応感と攻撃性および生活習慣との関係を中心に—. 教育心理学会第51回総会発表論文集, 287.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination theory in human behavior*. Plenum Press, New York.
- Ikesako, H., & Miyamoto, K. (2015). *Fostering social and emotional skills through families, schools and communities: summary of international evidence and implication for Japan's educational practices and research*. OECD education working papers, 121, OECD publishing, Paris. <http://dx.doi.org/10.1787/5js07529lwf0-en>.
- 上長 然. (2016). 青年期・成人期・老年期の発達研究の動向と展望. 教育心理学会年報, **55**, 18-37.
- 川喜多次郎. (1967). 発想法 創造性開発のために. 東京: 中公新書.
- 前川浩子・酒井 厚・眞榮城和美・梅崎高行・高橋英児. (印刷中). 子どもの社会情動的スキルの発達—子どもの自己と対人関係の発達に関する縦断研究—. 発達心理学会第28大会大会論文集.
- Masten, A. S. & Coatsworth, J. D. (1998). The development of competence in favorable and unfavorable environments: Lessons from research on successful children. *American Psychologist*, **53**, 205-220.
- Mahoney, J. L., & Cairns, R. B. (1997). Do extracurricular activities protect against early school dropout? *Developmental Psychology*, **33**, 241-253.
- 中山勘次郎. (1996). 児童の「習いごと」に対する親の関与について. 上越教育大学研究紀要, **15**, 337-349.
- 成田朋子. (2013). 早期教育のあり方について考える—保育科学性とその保護者への習い事についての回想調査に基づいて—. 名古屋柳城短期大学研究紀要, **35**, 89-103.
- OECD. (2015). *Skills for Social Progress; the Power of Social and Emotional Skills*. OECD Skills Studies, OECD Publishing, Paris. (<http://dx.doi.org/10.1787/9789264226159-en>). (2016年11月2日4時48分)
- 酒井 厚・中山紫帆・深澤祐介・熊谷好恵・菅原ますみ. (2017). 家庭—学校—地域の連携を支える教員の活動: 学校のアンカーポイント役割遂行の観点から. 教育心理学研究, **64**, 505-517.
- 桜井茂男. (1993). 自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み. 奈良教育大学研究紀要, **29**, 203-208.
- 佐々木卓代. (2009). 子どもの習い事を媒介とする父親の子育て参加と子どもの自己受容感—スイミングスクールを対象とした調査から—. 家族社会学研究, **21**, 65-77.
- 梅崎高行・眞榮城和美・前川浩子・則定百合子・上長 然・田仲由佳・酒井彩子・酒井 厚. (2014). 子ども期の社会性の発達に関する縦断研究プロジェクト (7)—子どもはいかにして習い事に出会いコンピテンスを育むのか—. 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 520.
- 梅崎高行・名取洋典. (2014). プロサッカークラブにおける指導の実践から親役割について考える. 子育て研究, **4**, 8-19.
- 山本浩二・荒木祥一・神野賢治. (2010). 学校部活動への関わりと社会性獲得との関連性に関する実証的研究. 津山工業高等専門学校紀要, **52**, 95-100.

付記

本研究は2015-16年度ゼミ生14名の総力で実施された。よく遊びよく学んだゼミ生の今後の活躍を願っている。